



# 長崎県農林技術開発センター



## たのしみコーナー

### 巻頭言

.....-1-

- 現場を絶えず見つめ直す！
- 表紙の写真

### 研究成果

.....-2-

- 10月中～下旬開花の黄色秋小ギク品種「長崎AYC1」
- 大玉で多収の青果向け複合病虫害抵抗性バレイショ新品種候補系統「西海40号」
- 台木「ヒリュウ」を用いたカンキツ「せとか」の高品質果実生産
- 膈内留置型黄体ホルモン製剤を利用した黒毛和種繁殖牛採卵プログラムの簡易化技術

### 研究紹介

.....-6-

- 長崎県における水稻主要品種の栽培適地マップ
- 地域未利用資源活用による特殊卵生産技術の開発
- イチゴ生果実の輸出を促進するための輸出相手国の残留農薬基準値に対応したIPM(総合的病虫害管理技術)体系の開発

### 研究機関の取組

.....-9-

- スマート農業実演・体験会を開催しました
- 長崎県農林技術開発センター一般公開
- 農林技術開発センター研究成果報告会の開催について

### お知らせ

.....-11-

- 農林資料館のご案内

## 巻頭言



農林技術開発センター  
森林研究部門長  
岩崎 充 則

表紙の  
写真

## ○現場を絶えず見つめ直す！

私たちは、「熊本地震」などの災害が起きるたびに、身のまわりの自然環境に目を向け、安全・安心な生活を過ごすうえで環境保全がいかに大切であるかを改めて思い起こします。

しかし、日常の生活において環境の大切さを意識し、そのために何らかの行動を起こすことはまだまだ少ないと感じます。

本県は、県土の約6割が森林です。県民が安全・安心な生活環境を過ごすには、その基盤となる森林を適正に管理し、水源かん養や土砂流出防止等の多面的機能を十分に発揮させることが不可欠と考えます。

機能を発揮させるには、林業の更なる活性化を図り、人手が森林から離れることなく持続的に管理していく必要があります。

現在、県内のスギ・ヒノキ人工林のうち、利用可能と見なされる36年生以上の面積は8割を超え、資源として充実しています。平成27年度の年間成長量は約25万㎡でしたが、これに対する伐採し、出材した量は10.8万㎡にとどまっており、木材利用拡大をいかに図るかが課題となっています。これは森林研究部門においても重大課題のひとつです。

しかし、人工林は他の農産物と異なり、一定の林齢まで育てあげれば、以後の適正な管理により数十年あるいは百年を過ぎても利用が可能です。言い換えれば「商品としての成熟期間が長く」、森林所有者の意向によっていつ販売されるかが左右される一次産品です。

したがって立木販売時には、経済情勢や消費者ニーズなどが植栽時と比較して大きく変化するため、「森林所有者の木材販売意欲をいかにして喚起するか」は、研究者にとっても力量が問われるところです。

課題解決には、木材生産に限らず様々な現場に足繁く通い、絶えず見つめ直す姿勢が大切と考えます。それまでのものの見方や考え方に固執することなく新しい発想を模索し、関係者たちと課題を共有しながら、県民のニーズに即した研究を進めていこうと思います。

## ○林業の主力産業

本県における菌床シイタケ栽培は、島原や県北地域を中心に行われており、年間3400tと全国5位の生産量を誇ります。菌床シイタケは、少ない土地面積でも高密度で栽培が可能のため、空調施設を用いた大規模な周年栽培も行われています。



しかし、近年は菌床資材の価格高騰や、燃料・電気料金の変動に対応するため、1菌床あたりの製造コストの縮減やシイタケ子実体の発生量増加など、生産性の向上が大きな課題となっています。

そこで当センターは、県内の菌床シイタケ生産者と協力し、生産性が向上する培地配合の解明や、新資材を用いた栽培試験に取り組んできました。

その結果、従来よりも少ないコストで従来と同等以上のシイタケ発生量を得られる菌床培地の配合が明らかになり、県内菌床シイタケ産業の市場競争力強化に繋がりました。

# 10月中～下旬開花の黄色秋小ギク品種「長崎AYC1」

## ●背景・ねらい

農産園芸研究部門 花き・生物工学研究室

小ギクは、家庭用仏花として年間を通じ堅調な需要のある品目です。また、露地栽培が可能で、他の花き品目と比べて労働時間が少なく、比較的所得率の高い品目であることから、本県における小ギクの作付面積は増加しており、平成27年度の作付面積は38.5haとなっています（花き生産出荷統計より）。当センターでは小ギクの安定生産に向けて、本県の気候にあった長崎オリジナル小ギク品種の育成に取り組んでいます。



主任研究員 池森恵子

今回育成した10月中～下旬開花の秋小ギク「長崎AYC1」について、その開花特性を明らかにしました。

表1 黄色秋小ギク品種「長崎AYC1」および対照品種「きぼう」の開花特性

品種名	試験年度	栽培条件 <sup>z</sup>	開花日 (月・日)	切り花長 (cm)	80cm 調整重 <sup>y</sup> (g)	無効側枝 数 <sup>x</sup> (本)	花蕾数 <sup>w</sup> (個)	花径 (mm)	フラワーフォー メーション <sup>v</sup>
長崎AYC1	2013	平張 <sup>u</sup>	10.28	97.7	84.0	0.5	38.3	44.8	3
	2014	平張	10.22	113.5	60.8	0.0	27.7	46.2	3
	2015	平張	10.18	106.3	55.0	0.0	20.0	43.3	3
	2015	露地	10.19	91.1	52.4	0.0	19.2	42.0	2～3
きぼう (対照)	2013	平張	10.28	105.3	70.3	10.0	36.7	36.0	3
	2014	平張	10.27	112.2	49.8	5.0	27.0	37.0	3～4
	2015	平張	11.5	112.1	59.2	2.8	27.0	37.0	2～3
	2015	露地	11.5	110.3	49.6	5.3	21.2	38.3	3～4

- z) 試験場所は長崎県農林技術開発センター（諫早市貝津町、標高15m）、  
栽植方法は畝幅120cm、条間40cm、株間10cm 2条植え（12,000本/10a）
- y) 80cm調整重は切り花長を80cmに調整後、有効側枝以外と下葉（20cm）を除去して測定
- x) 切り花先端から下方30cmより下に発生した花蕾を持つ側枝
- w) 花蕾数は開花した小花数と直径5mm以上の蕾数
- v) フラワーフォーメーション（図1参照）
- u) 平張施設：防虫ネットを被覆した平屋根型の簡易的な施設



写真1 「長崎AYC1」の開花の状況



写真2「長崎AYC1」の草姿

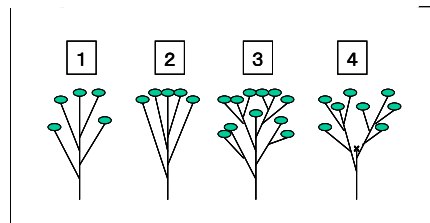


図1 小ギクのフラワーフォーメーション

## ●研究成果

「長崎AYC1」は6月中旬に定植すると、10月中～下旬に開花する秋小ギクです。花色は黄で、花径は4～4.5cmの半八重咲きの花形をしています（写真1）。フラワーフォーメーションは3（頂花が低い位置に着花する花序）であり、先端から30cm以下の部位から発生する側枝（無効側枝）が少なく、出荷調整や花束加工の際に手間がかからないのも特徴です。

「長崎AYC1」は平成28年6月28日に品種登録出願公表（第30995号）されました。今年度は長崎市、佐世保市、諫早市、壱岐市で試作されており、来年度より本格栽培が開始される予定です。

# 大玉で多収の青果向け複合病虫害抵抗性バレイシヨ新品種候補系統「西海40号」

## ● 背景・ねらい

農産園芸研究部門 馬鈴薯研究室

本県のバレイシヨ栽培面積の約7割を占める「ニシユタカ」は、多収で玉揃いが良く、栽培しやすい品種ですが、ジャガイモシストセンチュウやジャガイモYウイルスに弱いことなどから、これらの病虫害に強い青果向け品種の育成が望まれていました。また、近年、消費者からの「食の安全・安心」に対する関心の高まりから、減農薬栽培が可能な品種の育成が望まれていました。そこで、大玉・多収で、外観や食味がよく、複合病虫害抵抗性の「西海40号」(平成28年度品種登録出願予定)を育成したので紹介します。



主任研究員 坂本悠

表1 「西海40号」の栽培特性

作型	品種系統名	出芽期 (月.日)	莖長 (cm)	莖数 (本)	上いも 数 (個/株)	上いも 平均重 (g)	収量		でん粉 価 (%)
							(kg/a)	標準比 (%)	
春作	西海40号	3.16	44	2.1	4.8	133	406	107	11.3
	ニシユタカ	3.21	41	1.6	4.8	125	379	100	10.9
秋作	西海40号	9.28	48	2.5	4.0	137	354	132	9.4
	ニシユタカ	10.04	45	2.2	3.7	109	268	100	9.6

注1)2010~2016年の平均値

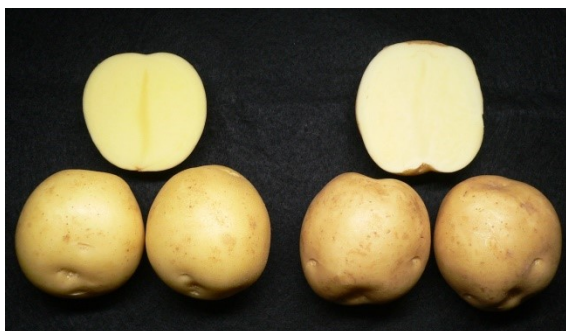


写真 「西海40号」 「ニシユタカ」

表2 「西海40号」の病虫害抵抗性、外観品質、蒸しものの調理特性

品種 系統名	病虫害抵抗性		外観		調理特性	
	ジャガイモ シストセン チュウ	ジャガイモ Yウイルス	目の 深さ	表皮の ネット	肉色	食味
西海40号	抵抗性	抵抗性	浅	微	明黄	中
ニシユタカ	感受性	感受性	やや浅	少	淡黄	やや否

## ● 研究成果

「西海40号」は、出芽時期が「ニシユタカ」より早く、初期生育が旺盛です。収量は「ニシユタカ」よりやや多く、上いもの平均重も「ニシユタカ」よりやや大きくなります。でん粉価は「ニシユタカ」とほぼ同じです(表1)。

ジャガイモシストセンチュウやジャガイモYウイルスに対して抵抗性があります(表2)。目が浅いため剥きやすく、滑らかな表皮で外観が優れます(写真、表2)。鮮やかな黄色の肉色で、食味は「ニシユタカ」より優れます。滑らかな食感で、ポテトサラダによく合います(表2)。

「西海40号」は、病虫害抵抗性を活かした減農薬栽培による生産コストの低減が期待できます



## 台木「ヒリュウ」を用いたカンキツ「せとか」の高品質果実生産

### ● 背景・ねらい

中晩生カンキツ「せとか」((清見×アンコール)×マーコット)は、外観がきれいで皮もむきやすく無核で食べやすい良食味品種なため、市場や消費者に人気があります。外観が滑らかな反面果皮が傷つきやすいため、風ずれ対策として施設で周年被覆栽培されていますが、糖度の低下や隔年結果の傾向が見られます。そこで、一般的なカンキツの台木「カラタチ」の変種でわい性な生育をする「ヒリュウ」を台木として利用した「せとか」の高糖度果実安定生産対策について検討しました。

果樹・茶研究部門 カンキツ研究室



室長 山下次郎

表1 台木の違いと少加温栽培「せとか」の生育、収量

調査年	台木	樹高 (cm)	樹容積 (m <sup>3</sup> )	収量 <sup>2</sup> (t/10a)	着果数 (個/m <sup>3</sup> )
2012 (7年生)	ヒリュウ	181	4.1	3.8	19.7
	カラタチ	220	7.6	4.9	21.5
2013 (8年生)	ヒリュウ	188	4.9	3.5	15.9
	カラタチ	228	9.6	4.0	10.8
2014 (9年生)	ヒリュウ	150	5.9	3.4	7.3
	カラタチ	230	11.1	5.0	12.6
2015 (10年生)	ヒリュウ	203	6.1	4.5	18.6
	カラタチ	245	11.6	5.4	13.3
平均	ヒリュウ			3.8	15.4
	カラタチ			4.9	14.2

<sup>2</sup> カラタチ台は167本換算、ヒリュウ台は220本換算



写真 外観美しい「せとか」

表2 台木の違いと少加温栽培「せとか」の果実品質<sup>2</sup>

調査年	台木	果実重 (g)	果肉歩合 (%)	果形指数	着色	糖度 (Brix)	酸含量 (g/100ml)
					a/b値		
2013年	ヒリュウ	218.4	86.0	121.0	0.52	14.5	0.94
	カラタチ	232.8	87.6	122.4	0.49	12.5	0.86
有意性 <sup>y</sup>		ns	*	ns	*	**	ns
2014年	ヒリュウ	195.7	84.7	122.0	0.45	14.5	1.18
	カラタチ	222.5	87.9	125.1	0.42	12.9	1.08
有意性		**	**	ns	*	**	ns
2015年	ヒリュウ	221.6	86.4	123.9	0.46	13.9	1.09
	カラタチ	242.5	87.3	120.8	0.44	12.5	1.15
有意性		ns	ns	ns	*	**	ns

<sup>2</sup> 分析日：2013年2月5日、2014年2月6日、2015年2月9日

<sup>y</sup> t検定により、\*\*は1%水準、\*は5%水準で有意差あり

### ● 研究成果

4年間の10a当たり平均換算収量は、ヒリュウ台は3.8t(カラタチ台の約80%)でしたが、ヒリュウ台10年生の樹高は2m程度に抑えられており、非常に作業性がよいことがわかりました(表1)。また3年間の果実品質を調査した結果、両台木とも果実重は200g程度で大差ありませんでしたが、糖度はヒリュウ台がカラタチ台より1~2度高い、概ね14度の果実が生産できました(表2)。



# 膈内留置型黄体ホルモン製剤を利用した黒毛和種繁殖牛採卵プログラムの簡易化技術

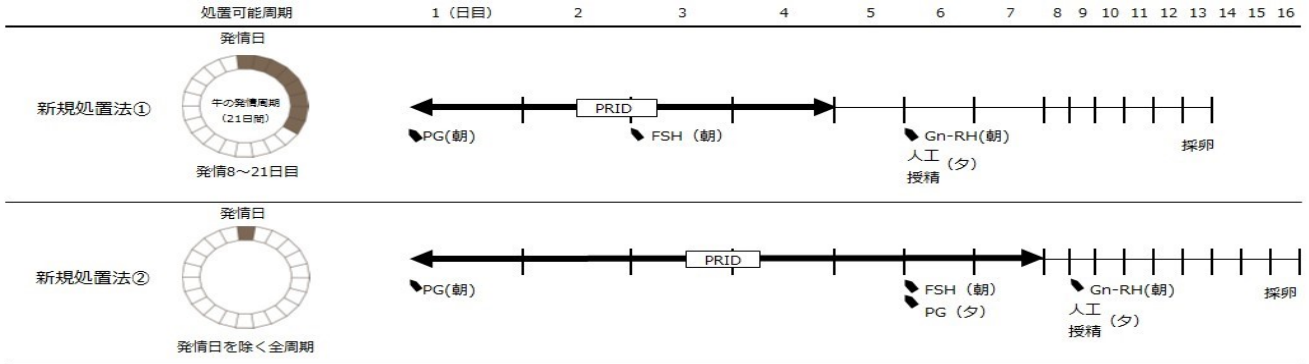
## ● 背景・ねらい

畜産研究部門 大家畜研究室

受精卵移植技術による優秀な子牛の生産は、家畜改良促進や肉用牛・乳用牛を飼養する農家の所得向上に役立ちます。しかし、移植に用いる受精卵の採取には、技術の普及・活用を阻む2つのハードルがありました。1つは牛の発情発見後、短い期間しか受精卵採取の処置ができないこと、もう1つは牛への多回数の処置が必要なことです。行う処置は注射が多く、牛にも人にも大きな負担でした。そこで牛の膈内に留置する黄体ホルモン製剤を活用した簡易な採卵プログラムの開発を検討しました。



主任研究員 山崎邦隆



PRID: プリッドティソー (膈内留置型黄体ホルモン製剤)  
 ●: 注射  
 FSH: アントリンR-10 (卵胞刺激ホルモン) 投与量 20AU/新規処置法 合計14AU (4・3・2・2・1・1・1に分け7回投与) /従来法  
 PG: プロナルゴンF (プロスタグランジン) 投与量 5mL/回 (各法共通)  
 Gn-RH: コンセラルール100 (性腺刺激ホルモン放出ホルモン) 投与量 2mL/回 (各法共通)

■新規処置法①により従来法と同等の成績が得られます。

	回収卵 (個)	正常卵 (個)
新規処置法① (n=11)	9.5±7.7	6.0±6.9
従来法 (n=11)	6.3±5.9	4.9±4.8

平均値±標準偏差。

### ■新規採卵プログラム

■新規処置法①により、黄体退行期～卵胞期 (発情後12～20日目頃) の採卵が可能

	従来法 (発情後10日目)		新規処置法①	
			(発情後10日目)	(発情後15日目) (発情後18日目)
正常卵数/総卵数				
牛1	4/4	2/5	6/10	3/11
牛2	3/5	0/1	5/5	6/6

■新規処置法②により、発情直後 (発情後1～7日目頃) の採卵が可能

	新規処置法②		新規処置法①	従来法
	発情後 1～7日目	発情後10日目	(発情後10日目)	(発情後10日目)
正常卵数/総卵数				
牛1	7/10		2/5	4/4
牛3	5/7	3/13	5/16	3/6
牛4	6/15	7/14	5/12	7/7

## ● 研究成果

開発した採卵プログラム(新規処置法①・②)により、牛の発情周期21日間のうち、処置可能期間が13～20日間に拡大しました。牛生体の黄体を退行させ黄体ホルモン製剤で代替するため、黄体の良否に関わらず処置開始できます。

また牛への処置回数も従来の半分程に低減できました。黄体ホルモン製剤の挿入と抜き取りは簡単で、牛への注射回数も9回から3～4回に減らせるため、牛にも人にもやさしい処置と言えます。

処置にかかる総費用も従来法と同等程度であり、作成したマニュアル「簡易な黒毛和種繁殖牛採卵プログラム」を基に、県内での更なる技術活用促進に向け普及を進めます。

●背景・ねらい

近年、水稻の登熟期の気温は高温傾向となっておりますが、低温の年がなくなったわけではありません。特に、比較的高温障害が出やすい「ヒノヒカリ」は、高温障害による品質低下が近年頻発しています。また、高温耐性品種である「にこまる」は、登熟期が低温気味の年に充実不足が発生し、移植時期の適正化(遅植えの是正)が課題として再認識されました。高品質米生産のためには、気象条件を考慮して、地域に適した品種を適期に作付けることが重要です。

そこで、近年の気象データを使用して、本県における主要品種の栽培適地マップを作成しています。

●現在までの成果

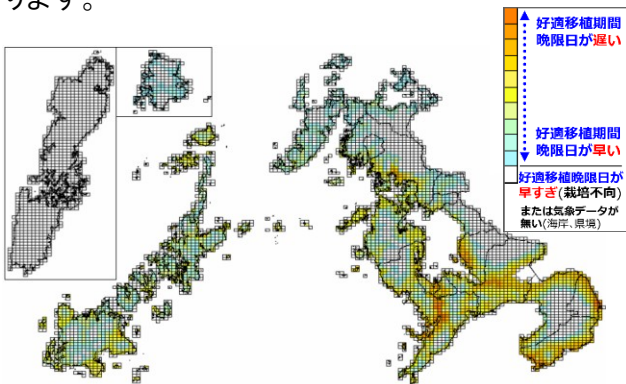
2016年度に「にこまる」と「ヒノヒカリ」の栽培適地マップを作成しました。マップは、1kmメッシュごとの日別平均気温と日長のデータ、および、各品種の生育予測式を用いて、近年の気温のもとで品質低下のリスクが低い「好適移植期間(安全性が高い田植えの時期)」を求め視覚化したものです。

「ヒノヒカリ」については、一定以上の高温と一定以下の低温の両方を避けることができる移植時期を推定したところ、図のように比較的高温が高い地域では適地となりません(白色)。これらの地域では「にこまる」は適地となっておりますので品種転換が望ましいといえます。

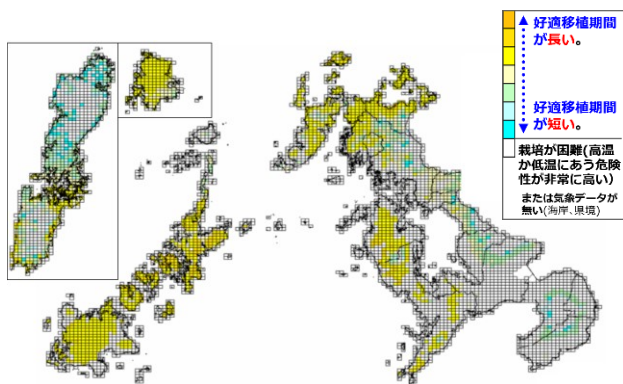
また、県北部の平坦部などは「ヒノヒカリ」の適地となっておりますが、5月下旬までに移植する必要があります。

■マップの見方

	にこまる	ヒノヒカリ
塗り分けの意味 (オレンジ色)	【安全性高い】 (好適移植期間の最終日が遅い)	【安全性高い】 (好適移植期間が長い)
(黄色)		
(青)	【安全性低い】 (最終日が早い)	【安全性低い】 (期間が短い)
(白)	【栽培するのは非常に危険】	【栽培するのは非常に危険】
マップ拡大時のメッシュ内の文字の意味	塗り分けの各色をアルファベットで表示	上段:好適移植期間の初日(月日) 下段:期間の日数



■「にこまる」の栽培適地マップ



■「ヒノヒカリ」の栽培適地マップ

【マップ作成に使用したデータ】

- (1) 国土交通省国土政策局「国土数値情報(気候値メッシュ, S62)」 「国土数値情報(行政区区域データ, H17)」(<http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/>)
- (2) 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センター「メッシュデータ(日平均気温, 1990~2009年)」(農業環境情報データセンター-gamsDB <http://agrienv.dc.affrc.go.jp/>)

●今後の研究

今後、「にこまる」以外の高温耐性品種の栽培適地マップを順次作成する予定です。移植時期の変更や高温耐性品種への転換など安定生産に向けた取り組みにご活用ください。(※注意:シミュレーションの想定よりもさらに高温や低温の年では品質低下となり得ることにご注意ください。)

なお、圃場単位など1kmメッシュよりも狭い範囲の好適移植期間を求める場合は、現地で実測した気温データと、本県が作成した「水稻生育シミュレーション2010」を使用してください。

※マップの入手・お問い合わせは、当研究室または各振興局まで。

## 地域未利用資源活用による特殊卵生産技術の開発

畜産研究部門 中小家畜・環境研究室

### ● 背景・ねらい

近年の鶏卵生産では、通常卵と差別化を図り付加価値をつけた特殊卵が注目されています。なかでもビタミンやミネラルといった栄養成分を強化した特殊卵は、消費者の健康志向の高まりもあり、今後も需要が見込まれます。一方、暑熱期の採卵鶏経営では産卵率や飼料摂取量の低下が生産性へ悪影響を及ぼしています。これらには酸化ストレスの関与が指摘されており、資源に含まれる機能性成分の抗酸化作用を活用した緩和技術の検討が進められています。

畜産研究部門では、県内の未利用資源を飼料に加えて資源中の機能性成分を鶏卵へ移行させる研究を実施中です。あわせて、機能性成分の抗酸化作用が暑熱期における採卵鶏の生産性向上につながるかについても調査し、年間を通じた鶏卵安定生産技術の開発を目指します。

### 研究内容

#### ① 未利用資源中機能性成分の鶏卵への移行



県内のミカン皮、ツバキ油粕、緑茶粕等を飼料へ添加し、採卵鶏へ給与



卵への移行

機能性成分が強化された特殊卵を開発

#### ② 機能性成分による生産性向上効果の調査

- ・生産性調査  
(産卵率、卵重、飼料要求率、卵質検査等)
- ・酸化ストレスに係る調査  
(卵黄・血漿中過酸化脂質、抗酸化力等)

機能性成分の抗酸化作用が暑熱期における採卵鶏の生産性向上につながる技術の開発





## イチゴ生果実の輸出を促進するための輸出相手国の残留農薬基準値に対応したIPM(総合的病害虫管理技術)体系の開発

環境研究部門 病害虫研究室

### ● 背景・ねらい

国は農産物輸出促進政策に積極的に取り組んでおり、イチゴ生果実は輸出重点品目のひとつです。しかし、イチゴ生果実の輸出には輸出相手国の残留農薬基準値に対応した病害虫防除体系を確立し、相手国の残留基準値を越えない生果実を生産する必要があります。長崎県においても、台湾を輸出相手国として平成26年度から病害虫防除体系の検討を行ってきました。平成28年度からは、農林水産省の「革新的技術開発・緊急展開事業(地域戦略プロジェクト)」の「生果実(いちご)の東南アジア・北米等への輸出を促進するための輸出相手国の残留農薬基準値に対応したIPM体系の開発ならびに現地実証」試験に農業・食品産業技術総合研究機構野菜花き研究部門を研究代表とする6研究機関と共同で取り組んでいます。

輸出相手国の残留農薬基準値に対応するためには、農薬の選択および使用時期の設定のほか、天敵を利用した生物的防除、高濃度炭酸ガス、防虫ネット、UV-Bランプ等を利用した物理的防除など農薬以外の病害虫防除技術を組み合わせた総合的病害虫管理技術(IPM)体系の開発が不可欠です。当センターではうどんこ病に対してUV-Bランプ、ハダニ類に対し天敵のカブリダニ類および高濃度炭酸ガス、アザミウマ類に対し防虫ネットを残留リスクの少ない農薬の防除体系に組み合わせ、その防除効果と農薬の残留状況を調査しています。

本研究では平成30年度までにIPM防除体系を開発し、マニュアルを完成させる予定です。



### 試験実施状況

左写真: 白色防虫ネット展張

下写真: UV-Bランプの夜間点灯



## スマート農業実演・体験会を開催しました

平成29年2月2日(木)に農林技術開発センター干拓営農研究部門圃場において、長崎県スマート農業実証協議会主催による「スマート農業実演・体験会」を開催しました。農業者、関係者を含め、約100名が参加し、「ロボットトラクター操作体験」、「GPSガイダンス自動操舵付トラクター操作体験」「アシストスーツ装着体験」を行いました。

ロボットトラクターは地元の農業者にオペレーターとして最初の設定作業から体験していただき、ロボットトラクターと有人のトラクター2台での耕うん作業を実演していただきました。体験者からは「スタート開始直後は目の前の無人トラクターに不安を感じたが、慣れてしまえば、一人で2台トラクターが操縦でき、効率的。ぜひとも導入してもらいたい」との意見が聞かれました。

また、「GPSガイダンスシステムによる自動操舵付トラクター操作体験」では、既存のトラクターにシステムを取り付けることにより、トラクターの直進をサポートするもので、体験者からは「通常の操作に比べて非常に楽だ」との意見が聞かれました。

さらに、アシストスーツについては「マッスルスーツ(東京理科大開発)」と「リベロ(和歌山大開発)」の2つのスーツの試着体験を行い、「重量物持ち上げ時の腰が楽でした」などの感想がありました。

今後もロボットトラクター、アシストスーツについては、農家が実際の作業の中で使用しやすい改良や本県の栽培体系にあった使用法を検討していく予定です。



ロボットトラクター



ロボットトラクター(無人+有人による協調作業)



アシストスーツ(マッスルスーツ)装着体験



アシストスーツ(リベロ)装着体験

研究企画部門 研究企画室  
干拓営農研究部門

## 長崎県農林技術開発センター一般公開

平成28年11月19日(土)に農林技術開発センター本所(諫早市貝津町)において、長崎県農林技術開発センター一般公開を開催しました。これは、長崎県科学技術週間の行事の一環として、県の研究機関施設を一般に公開するものです。当センターも、広く県民の皆様、農林業試験研究に対する理解と関心を深めていただくために、毎年開催しているものです。



「長崎ちゃん麦」を使用したちゃんぽん試食



森の工作

ちゃんぽん用として育成された「長崎ちゃん麦」を使ったちゃんぽん試食や「みかんの糖度あて」、豚汁の試食は人気がありました。

また、毎年実施しているクイズラリーや小学生等の子供を対象に実施している「森の工作」や「子どものための泥だんごづくり」



みかんの糖度当て

今年は天候に恵まれず、雨天での開催となりましたが、例年と同様にたくさんの方に参加していただきました。

毎年アンケートを実施していますが、9割以上の方が満足されているという結果となっています。

今回雨天のため24(晴天の場合は26)の体験メニューを提供しましたが、中でも



豚汁試食とお茶の試飲

等は、根強い人気がありました。

今後も皆様楽しんでいただきながら、長崎県農林業の試験研究について知っていただく機会とするため、長崎県農林技術開発センター一般公開を続けていきます

研究企画部門 研究企画室

農林技術開発センター研究成果報告会の開催について

平成29年2月10日(金)に壱岐振興局において、長崎県農林技術開発センター農産園芸研究部門の研究成果報告会を開催しました。関係者を含め、28名が出席し、「イチゴ「ゆめのか」の安定生産技術の開発」、「イチゴ「ゆめのか」の主要病害の発病特性」及び「イチゴ育種研究について」という内容で成果報告を行いました。

発表後には意見交換が行われ、「炭酸ガスの使用方法」、「不受精果の発生要因」等多くの質問があり、生産者の皆さんの関心の高さがうかがえました。



農産園芸研究部門 野菜研究室

お知らせ

農林資料館のご案内

ピックアップ

今後の農業発展を考えるためには、農林業の技術変遷を知り、今後の農業技術の方向を考える必要があります。長い歴史の上に築かれてきた農林業の伝統、それを支えた農具・農業機械を収集・保存・展示し、それらの持つ固有の性質を研究することが重要です。

農林資料館は、先人の知恵である農機具の歴史を展示し、農林業ひいては食育の場としても活用いただける施設です。

見学は可能ですが、事前の申し込みが必要となりますので、希望する場合は当センターの研究企画室にお尋ねください。

